国立白門会ニュース

第46号
国立市東1-1-19-302
山口康雄574-5581
印刷：キュー・ビィー・インターナショナル

第三十五回総会をむかえて

支部長　山口康雄

本年も定時総会を迎える時期になりました。支部長を受けて七年が経過し、この一年間は気持ちがマンネリ気味で、会員の皆様には申し訳なく思っています。支部の活動は震災の影響で、「さくらフェスティバル、学術講演会、ホームカミングが中止されました。

秋の親睦旅行はグリーンピア津南へのバス旅行で、楽しく挙行されました。学員会の報告としては、卒業時の維持会費納入がはじまり、会員の年会費が無くなりました。しかし既卒者の学員会費三万円の納入については、なお、一層のご理解とご協力をお願いしたいとのことです。

学員ネットワークの拡充、強化を目的に学員時報の発行回数は現行年七回から年四回とするが、内二回は学員会会費納入学員だけでなく、住所判明学員全員に発送することが決定された。

学員ネットワークの拡充強化のため、支部のホームページ作戦・支援のため、助成条件を満たした支部に助成金と支援金の交付、そして支部活動費の補助金を交付する。

学員サービス活動の推進のため、学員間の交流を拡げ、親睦を深める機会あるいは場として、各地域の卒業生が経営する飲食店その他店舗を紹介するタウン誌の全国版を発行したり、地方拠点都市に談話室（サロン）を設置することなどが事業計画として決定された。本年も我が国立支部の発展のため、会員の皆様と一緒に頑張ります。

平成二十三年度 第三十四回 定時総会開催

梅雨の晴れ間の六月十二日（日）午後三時から駅前せきやビル七階「エソラホール」で開催された。来賓として大学から吉田亮二常任理事のご臨席を得、学員会からは木下澄雄事務局長のほか、近隣支部から斉藤芳司小金井支部支部長、出口純輔小平支部副支部長、山崎省次立川支部幹事長のご出席をいただいた。

総会は会員三十名の出席のもと開催された。山口康雄支部長の挨拶に続き、小島泰義副支部長を議長に選出後、上程された第一号・二号議案の前年度活動報告、決算報告などを一括承認し、続く第三号・第四号議案の今年度活動計画、予算案なども一括承認された。引き続き第五号議案では、任期満了の役員改選について選考委員会の丸本大委員長より提案説明があり、山口康雄支部長、石井孝幹事長ほか全役員留任とする案が満場一致で可決承認された。

議事終了後、来賓の方々をご紹介し、吉田常任理事と木下学員会事務局長のご挨拶をいただき、主席者全員の記念写真撮影で総会を終了した。

その後、懇親会に移り、平本聖子副幹事長の進行のもと、近隣各支部代表のご挨拶をいただくなど、歓談の輪が広がっていった。アトラクションで招聘したボーカリスト伊東洋子さん（駐留軍キャンプの最後の一人）とバンドによるジャズの演奏に酔いしれ、会場は大いに盛り上がりを見せ、最後に校歌・応援歌を力強く歌い上げて終了した。

（石井　記）

第34回国立白門会総会　23. 6. 12

ジャズのスタンダード曲に青春時代がなつかしい

新年会　チェロ伴奏で校歌斉唱

平成二十四年新年会は、一月二十二日（日）午後三時から、駅前せきやビル七階「エソラホール」で開催、会員・家族をはじめ友人や知人など、昨年を上回る六十名が出席した。

例年通り平本副幹事長の名司会でスタートし、山口会長挨拶や新人紹介のほか、市橋顧問から、主宰する『中桜俳句会』既刊の合同句集『初桜』（創刊号、第二集）の紹介かたがた現況報告があり、また、大学評議員　風間俊範氏より箱根駅伝・その他、大学の現況について説明があった。

飲み物は老舗の酒屋で、このビルのオーナーでもある同窓の　関　喜一さんのご厚意で豊富に揃い、グラス片手にいくつもの談笑の輪ができた。

歓談の合間に、昨秋の旅行で、好評だったビンゴゲームが始まり、「上がり」賞金として現金の掴み取りまであり、会場を大いに沸かせた。

アトラクションとして招聘したチェリスト高城晶一・ピアノ伴奏山口真未夫妻のクラシックから童謡迄、幅広いジャンルの名曲の数々に酔いしれ、リベルタンゴのアンコール演奏には、惜しみない拍手が寄せられた。

最後はいつものテープ伴奏に変え、チェロ・ピアノの伴奏で中大校歌の合唱（石井幹事長が事前に楽譜を提供）。そして、前中央大学常任理事　玉造竹彦氏の中央大学と我が国立支部への力強いエールで幕を閉じた。

秋の一泊旅行は新潟県津南町　グリーンピア津南

恒例の一泊旅行は十一月十七日・十八日の両日、新潟は米どころ魚沼地方へのバス旅行。

本来ならば、立川出発のところ、参加者が二十五名と、まとまったおかげで、バスは特別に国立出発。もちろん貸し切り状態。八時半に出発し、関越道をひた走り、一時頃には津南町「グリーンピア津南」に到着。まず、ホテルの広大な敷地にびっくり。ホテルの前にはスキー場が広がり、大きな池もある。かつて、国の資金で、建設したリゾート施設とか。近くの林で椎茸狩りを楽しんだ後、館内へ、入浴等で一休みした後、お待ちかねの宴会場へ。重野さんのご厚意で地元の「どぶろく」もいただく。その美味しさに、あらためて、この地方が日本を代表する米処であることを再認識した。宴会の後は別会場でカラオケ大会。次々と曲が入り、大いに盛り上がった。

翌日は、両手でお米の「すくい取り」各自、思い思いの工夫で大量取得を試みる。バスでホテルを出発、途中、越後第一の禅寺「雲洞庵」に立ち寄る。このお寺はＮＨＫ大河ドラマ「天地人」の舞台となり、直江兼続が幼い頃、修行したお寺としても有名である。昼食に名物の「へぎそば」をいただき、無事国立に到着。幹事さんお世話になりました。

南魚沼市　雲洞庵

「海の日」は恒例の納涼会

七月十八日（海の日）、昭和記念公園のバーベキューガーデンで納涼会を開催した。会員・友人二十名が集まり、平本聖子さんのお母さんも、炎天下にもかかわらず、お元気に参加、ありがとうございます。

手馴れた手つきの斎藤氏が肉や野菜を焼き、冷たいビールに歓声。まわりの若者グループに負けない大きな声で談笑。

差し入れのワインや日本酒も飲み干した。それでも足りない人達は、立川駅前の居酒屋でまた一杯。よく飲みますね。

石井　記

「くにたち市民まつり」に参加

11月6日（日）大学通りで開催の、「くにたち市民まつり」に参加。例年通り、「磯辺焼き」を販売した。我が支部が市民まつりに初参加以来、30年が経過した。その間、一度の中断もなく、継続出来たのは会員の皆様のご協力と母校中央大学への想いのおかげであると、感謝いたします。当日は、呼び込み、パック詰め、焼き方の連携のもと、一時頃には完売。残り火でイカやイモを焼きながら談笑。話題も会員の高齢化に伴い、いつの間にか健康談議に夢中。若い皆さんの入会を心から願う。

磯辺焼き

1パック
3個入り
２００円

青梅七福神を巡る

国立白門会のアウトドア行事、武蔵野・多摩地区ウオーキングの一環として、今年の第一回『歩き会』は三月八日（木）、昨年の日野七福神めぐりに続き「青梅七福神めぐり」を行った。

七福神めぐりは江戸、文化・文政の頃、庶民信仰として始まったとされるが、新年初詣に限らず、立春の日にも参拝が行われたと伝えられている。

三月初めでは新春にも立春にも、ちょっと遅いが、その混雑を避けてというわけで、曇り空のやや肌寒い当日、午前九時青梅駅に集合したのは、白門会会員（堀田・石井・斎藤・奥平・北井）の他、支援参加の友人など合計十二名の善男善女。

青梅市内を蛇行する多摩川の冬の穏やかな流れや釣り人を眺めながら、周辺のなだらかな奥多摩の山々の曲線に癒されながら、七寺をめぐる約十五キロのコースを全員無事、完歩した。

途中出会った古老によれば、青梅七福神の歴史は浅く、昭和五十五年元旦からとか。

市内の電器商が近隣七福神めぐりを続けている中、寺の多い青梅にも七福神めぐりを作れば信仰と同時に市内観光、街おこしにも一役買うことができるのではないかと、昵懇の延命寺住職に話を持ちかけたところ、当時九十五寺の中に七つの寺が、それぞれの福神を祀っていることが判明し、それらをあわせ、急遽「青梅七福神」としてスタートさせた由である。

多摩川を挟む北側（左岸）に五寺、南側（右岸）に二寺が点在するため、多摩川をまたぐ橋を都合四回渡るコースであったが、青梅街道に面した「明白院」の山門脇で、有名な「しだれ梅」（青梅市指定の古木。残念ながら今年の開花は、かなり先）の満開を想像しながら昼食を取り、最後七番目の寺「聞修院」をめざして再度歩き始めた。

小木曽街道の少々長いトンネルを抜けた青梅ゴルフ裏に、その寺はあった。記念の御朱印帳に墨書・朱印を受けた。午後三時過ぎに青梅駅に戻り、駅前の喫茶店で反省会の後、解散。

反省不足の六名は立川駅前の居酒屋で第二次反省会を行った。

北井　記

青梅七福神

一・延命寺（臨済宗）＝大黒天
二・宗建寺（臨済宗）＝毘沙門天
三・玉泉寺（臨済宗）＝弁財天
四・清宝寺（真言宗）＝恵比寿
五・地蔵院（臨済宗）＝布袋尊
六・明白院（曹洞宗）＝福禄寿
七・聞修院（曹洞宗）＝寿老人

宗建寺　（毘沙門天）

清宝寺　（恵比寿）

明白院　（福禄寿）３分咲きの「しだれ梅」

レトロな街、青梅市市街　懐かしい映画の看板

ボーリング大会

九月十五日親睦ボーリング大会を開催した。中大の体育関連事業を支援されている、佐藤 安氏のホームレーン「立川スターレーン」に九名が集まり熱戦を繰り広げた。

かつては、多摩地区の各市に二、三ヶ所あったボーリング場も、めっきり数が少なくなった。

当ボーリング場はボーリングの草創期から営業し、現在に至る貴重な存在である。最近、中高年者を中心に見直され、また、ボーリング場の数も減っていることもあり、結構混んでいるようだ。

年一回の大会ですが、ストライク続出でベテランの佐藤氏もびっくり。

ゲームの終了後、筋肉痛を予防するため、立川「魚一丁」で打ち上げをやりました。写真は、筋肉痛予防の打ち上げの写真のみで、何故か、肝心のボーリングの写真はありません。

また、聞くところによると、ボーリングはやらないのに、筋肉痛予防の打ち上げのみ参加した人がいたとか。

ボーリングの面白いところは、普段練習していなくてもストライクの可能性があり、実力以上のスコアが出る可能性があることではないでしょうか。皆さんもどうぞ、若い頃を思い出して挑戦してみては、いかがでしょうか。

石井　記

立川スターレーン　042-524-3001

国立支部名入りジャケット新調

若干の在庫があります。

サイズはS・M・L・LLの4種類です。

価格は　会員特価4,200円です。

ご希望の方は石井幹事長へお申込みください。

三多摩地区囲碁大会　国立支部ワンツーフイニッシュ

三多摩地区連絡協議会第三回親睦囲碁大会は、1月29日（日）午後1時から「立川本因坊」で開催されました。参加者は12名で、立川支部：5名・三鷹支部：3名・日野支部：1名・調布支部：1名・国立支部からは沼崎さんと玉造さんの2名が参加しました。沼崎さんは立川支部、調布支部の五段の猛者を連破して決勝へ進出、もう一方の山では玉造さんが勝ち抜きました。はからずも国立支部会員同士の決勝戦となりましたが、最終的に玉造さんが優勝しました。終了後の懇親会で支部相互の親交を深めました。

第２１回　中央大学ホームカミングデー

２０１２年１０月２８日（日）　多摩キャンパス　9：45

主催　中央大学　　協賛　中央大学学員会

例年　我が支部から10数名の会員・家族が参加しております。

中央大学学術講演会

開催日　２０１２年１１月１８日（日）　午後　３：００

会　場　せきやホール　（駅前　西友ビル７階）

講　師　中央大学商学部教授　原田喜美枝

テーマ　世界のワインと日本のワイン
－日本のワインの特殊性

※　当日はワインの試飲も予定しております。

趣味に支えられて九十年

市橋千鶴子（千翔）

晩酌の後、父の酔余のバイオリンが鳴り出し、休日には、子連れでバレーやオペラ見に出掛ける母、そのような、どちらかと言えば、ハイカラ好みの家庭で育ったのに、何故か私は、幼少のころから和好みであった。

小学二年生のとき、床の間の、母の嫁入り道具の弾かずの琴を見て育った私は、友人の琴の稽古に同行し、のちに母の同意を得て、その師の指導の下に、卒業時まで琴の稽古を愉しんだ。

このときの琴の演奏会で、私は始めて、別会場で行われていた謡曲の、不思議な音律を聞いて、子供心にも、すごく惹かれるものがあったことを、いまだに鮮明に記憶している。

長じて、司法修習生前期の課外授業として赴いた、水道橋の能楽堂において、いきなり人間国宝宝生九郎師の、能「隅田川」の至芸に接し、始めて観賞した能の幽玄の深さに驚き、感動の余り、しばらく席から立ち上がることができなかったほどであった。

弁護士になってから、私は幸運にも、実務修習でご指導をいただいた教　官の先生の事務所に就職することとなり、法曹としては、まことに幸先のよい出発であった。ところが私は、無謀にも、弁護士業務のイロハも極めないうちから能の稽古を始めてしまっていたのである。事件の打ち合わせをしている最中でも昨夜稽古した謡のリズムが脳裏を横切り、つい膝で調子をとっていて、日頃は温和な大先生から、こっぴどくお叱りを受けてしまった。

それにも懲りず、よほど性に合っていたのか、謡、仕舞、舞囃子と、忙しい仕事の合間の、月三回の稽古は殆ど休まず、まして観世能楽堂での秋の大会の折には、万難を排して稽古にはげみ、三十年間心の底から能を愛した。

ところが、もう一方の趣味のゴルフでも、つい度を過ごして無理を重ね、その結果、左膝を痛めて正座の出来ない身体となってしまった。

正座ができなければ、もう能の舞台は努まらない。ついに、舞囃子「砧」の後シテを最後に、能との関わりとは訣別することに決めたのが、能の稽古を始めてから三十年後の昭和六十三年九月のことであった。

幸い、ふとしたことから、正座をしなくとも努められる俳句を始めており、この道も早くも二十五年の歳月を重ね、俳句はいまの私にとって、大きな生き甲斐とまでなっている。

就中、私が学員会副会長の折、堂野達也学員会会長の発案で、平成五年創設した学員時報の「中央俳壇」は、ご入院の際、選者の石原八束師から私に後任の選者のご指名をいただいて十三年目の昨年春、「悠」主宰水見壽男師に選者を交替してもらった。折しも八束師の十三回忌を過ぎたことでもあり、淋しい反面、大過なく重責を果たし得て内心安堵している。同じく平成六年発足した学員会内の「中央俳句会」の選者も、石原八束師から引継いで数年間は、私ひとりで努めていたが、会報に毎回選評をしたためる作業が楽しくはあるが結構大変で、前記同様水見壽男師のご協力をいただいてきた。昨今は、クレセントでのご指導も重なり、並々ならぬご多忙のご様子なので、昨年から、澤島和計顧問と藤原香人前会長に、さらに本年は長沼ひろ志新会長に交代して貰って、計四人の選者が交替で努める体制が整い、会も随分大きく成長した。

さて、われらが国立支部俳句同好会「中桜俳句会」の団結心はいよいよ固く、設立満三年を目睫にして、早くも「合同句集初桜」第三集の刊行準備が始まり、一同の力作が目白押しに出番を待っている。

いま私は、九十二年の生涯を通じて、種々の趣味によって、仕事に追われる日常生活に多くの潤いを与えられ、通常ならば無味乾燥となる晩年を、いまなお、志しを等しくする仲間とともに、明日の夢を追うしあわせを享受でき、ありがたい日々を　過ごしている。

アウシュビッツ・ビルケナウ

重野和夫

旅を面白くする

昭和三十年代後半に「遠くへ行きたい」という歌が流行った。知らない町を歩いてみたい、どこか遠くへ行きたい・・・永六輔作詞、中村八大作曲でNHKの「夢であいましょう」の番組から流行ったように記憶する。この歌は、旅することのロマンをうまく表現していると思っている。

この歌に触発された訳ではないが、私は若いときから国内、海外によらず見知らぬ町を訪ねることが好きだ。自然の中に生きる人々の生活や文化に驚きや感動を覚える。さらにその街の歴史に至るまで知りたくなると、単なる物見遊山では済まされなくなり、興味は一層増幅されて病膏肓に入る心境になる。旅するとき、旅行案内書は教科書的存在で、必要なことはいうまでもないが、私は司馬遼太郎や吉村昭など、小説家による歴史（記録）小説を努めて読むようにしている。共通していることは、史実と証言の徹底的取材と検証、調査を基にして、緻密に事実のみを描いていることである。著者の主観的感情表現を省く文体が特に良く、目的地における興味関心を、いやが上にも燃え上がらせてくれる。

ポーランドの自由

今年（２０１２年）三月から四月にかけて、中欧六カ国を旅してきた。

今回、ポーランドは初めて訪れた。ポーランドは、これまで二百年間、近隣の列強諸国によって苦しめられてきた。１７９５年、近隣のロシア、プロシア、オーストリアの三国に分割され、１９１８年の第一次世界大戦まで、地図上から姿を消した。

１９３９年ナチス・ドイツ軍は圧倒的軍事力で侵入して占領した。ポーランド側犠牲者は全人口の五分の一に及ぶという。戦後はソビエットに支配され、国民の意思が自由にならない、苦渋の時代を過ごした。この間ポーランド人は、生死をかけて幾度となく自由化運動など、独立回復へ戦いを挑んできた。１９８９年共産主義の終焉とともに、やっと資本主義体制下の自由を手にした。同時に、人類史上類を見ない悲劇の場所、アウシュビッツが残った。この思いから、ポーランドには一度訪れたいと思っていた。（ただし、アウシュビッツは、気楽にいくところではない。）

三月三十日ウイーンから、バスで延々と続く丘陵地帯を、約八時間、四七〇キロ走って、ポーランドのクラフクの街に入った。途中、地続きのヨーロッパでは、国境が畑の真ん中にあった。ふと昔見た映画「ひまわり」に出て来る、広大なひまわり畑を連想する光景が各所に現れた。ポーランドに入ってから森が現れ、森が途切れると原野の向こうに発電所の大きな煙突が現れて、白い蒸気を吐き出していた。

翌日は、朝から真冬を思わせる強風と冷たい雨。気温は摂氏三～四度C。寒さのため、傘を持つ手もかじかんでしまう。

第二次世界大戦で、戦火を免れたクラフク市内は、中世の街並みがそのまま残って、世界遺産になっている。午前、街の見学を済ませてオシフェンチム（アウシュビッツのポーランド地名・アウシュビッツはドイツ名）の街に入り、街の中心から車で約五〇分ほど走ったところに、アウシュビッツ収容所があった。当時の建物の周囲は、有刺鉄線が張り巡らされて、一見して収容所であることがわかった。

収容所は、１９４７年ポーランド国会で「元収容所、敷地及び物件の永久保護、収容所でのナチス・ドイツの犯罪に関する証拠、収集、研究、発表」することが決議された。名称は、「国立アウシュビッツ・ビルケナウ博物館」となり、国際アウシュビッツ委員会によって運営されている。

博物館・記憶の場として現在に至っているが、元収容所についての考えは、「先ずは墓場である」などとする犠牲者および関わりがあるユダヤ人はじめ、各国各人の思いがあるようだ。

アウシュビッツ一号収容所

アウシュビッツ収容所は、アウシュビッツ一号収容所（写真１）と、ここから１．５キロ離れたアウシュビッツ二号・ビルケナウ収容所からなり、４０平方キロメートルの広大な面積からできている。

この日、アウシュビッツ一号収容所から見学が始まった。収容所は各国の見学者で賑わっていたが、ヨーロッパ人が多く、特に若い人が目立った。各国の言葉が飛び交う中、私の期待が的中して、日本人公式ガイドの中谷氏の説明で、案内していただけることになった。

一人一人がイヤホンを装着してから、建物内の見学が始まった。収容所建物の一部が、資料と遺品の展示場になっていた。ホロコーストと大量虐殺の現場で、多くの遺品や当時の大きな写真などを目の前にして、絶望感、信じられない現実にショックを受けた。説明する中谷氏の静かで、ゆっくりと話す言葉が、イヤホンから聞こえてくる。日本人の日本語の解説を聞いて、さらに衝撃的で、強力なパンチを食らったような、圧迫感の連続であった。暗い展示室の中で見学者は、イヤホンに耳を傾け、終始無言であった。その静寂さが、異常なほどで不気味に感じた。

中谷氏は、事実を事実として、丁寧に説明していた。しかし、説明の最後に「だからこうしなければいけない」という、結論めいた言葉を云うことはなかった。終始聞く側が、人間としての能力・判断力を必要とした。この場を体験した人は、人間とは何か、どうしたら二度とこの悲劇を起こさないようにできるか、自問自答するであろう。そして、歴史を振り返り、人間の尊厳について問い続けるのではないか。　館内は施設、展示品すべて写真撮影は自由であった。しかし、ナチス犯罪のもっとも衝撃的な証拠である、２トン近くある女性犠牲者たちの髪の毛の前では「ここだけは、カメラを遠慮してください」の言葉が耳に残っている。さらに一室には、ガス室で使われた青酸ガス発生薬、チクロンBの空缶が山と積まれ（写真２）、一部にはガスを吸着させる珪藻土の塊が、むき出しになっていた。

次ページに続く

「一缶で約150人を15～20分で窒息死できる」と説明があった。側らに殺人工場の大きな模型があり、連行されてきた人達が、地下室のガス室へ入っていく様子を、わかりやすく説明していたのには驚いた。遺品は、次のようなものが展示されていた。靴が八万足以上。トランク3800個（2100個には文字が書かれている）。鍋12000個。眼鏡40キログラムなど。

アウシュビッツはなぜ作られたか。ナチスの思想の根底には、アーリア人種こそ、世界を支配する人種と信じ、容姿淡麗、知性が高く、運動神経に優れているのがアーリア人的で、ハインリヒ・ヒムラ（ナチ親衛隊指導者）がそうであったとされる。逆にユダヤ人の血は最も劣っていると狂信し、強く憎悪した。反ユダヤ主義、反民主主義、反共産主義にみるドイツ民族の優越性があった。このためナチス・ドイツ人はユダヤ人の絶滅、スラブ人、ジプシー（ロマ人）その他の民族の絶滅を計画していた。以下、収容所で購入した著書『アウシュビッツ・ビルケナウ』日本語版には次のように書かれていた。

☆強制収容所としてのアウシュビッツ

1940年6月ポーランド人政治犯が、囚人として送られてきた。その後時間と共に増え、1942年以後占領した地域から捕虜、ユダヤ人など約130万人の内40万人が収容された。内訳は次のようであった。ユダヤ人20万人、政治犯16万人、反社会分子2万千人、教育囚人1万千人、ポーランド人数千人、その他刑事犯、エホバの証人、ホモなど。

☆ユダヤ人絶滅センターとしてのアウシュビッツ

1942年からは、アウシュビッツはユダヤ人絶滅センターとしても機能した。性別、年齢、職業、国籍と政治的思想を問わず、「ユダヤ人である」という理由だけでガス室で毒殺された。1944年5～6月に、ドイツ軍は44万人のユダヤ人を、ハンガリーから収容所に連行した。（このときドイツ軍カメラマンによって200枚の写真が撮られ、ガス室へ向かう人々の姿、ガス室に入る順番を待っている姿が写っている。）この他、ユダヤ人の国籍別の数はポーランドから30万人、フランスから6万9千人、オランダから6万人、ギリシャから5万5千人、チェコから4万6千人、他スロバキア、ベルギー、ドイツ、イタリア、ノルウエーなどから合計110万人連行してきた。1945年1月27日、ソ連軍によってアウシュビッツが解放されたときに、7千人の囚人が生存し救出された。

☆アウシュビッツの犠牲者数

ユダヤ人100万人、ポーランド人7万～7万5千人、ジプシー2万千人、ソ連軍捕虜1万4千人、その他1万～1万5千人。合計110万人

死の壁・ガス室

収容所内の遺品展示室を出て、強風雨の中、びしょ濡れになって、次の棟に向かった。ARBEIT MACHT FREI（働けば自由になる）と書かれた強制収容所ゲートをくぐり、囚人が収容された居住部屋、地下監房、立ち牢などを見た後、10号棟と11号棟の中庭には「死の壁」（写真3）といわれ、1万人以上の囚人が裸にされ、後ろ向きに立たされて、背後から銃殺された、生々しい弾痕の残る場所があった。花束が冷たい雨に打たれていた。

最後にガス室、焼却炉を見た。何万人も殺したガス室（写真4）は、周囲がコンクリート壁で、褐色に汚れていて、天井から電球がつり下げられ、一部にチクロンBを投下する穴が開いていた。ガス室に向かって合掌。すぐ隣が焼却炉（写真5）だ。3台あったが2台が焼けただれた状態で残っていた。

アウシュビッツ2号・ビルケナウ収容所

1940年ナチス・ドイツは、オシフェンチム市8村の住民1200人の家屋を破壊して、住民を強制労働者として連行した。その跡にアウシュビッツ1号収容所が作られたが、ここだけでは、囚人の処理が間に合わず、1年後ブジェジンカ村に、さらに面積1.4平方キロの広大な強制収容所（殺人工場）を作った。そこが、アウシュビッツ2号・ビルケナウ収容所である。台風のような悪天候の中、アウシュビッツ1号収容所から車で20分ほどで、ビルケナウ収容所に着いた。

鉄道の引き込み線が、死の門といわれる建物の中に伸びていた。鉄条網の中は、枯草の中にバラックの跡が規則正しく並び、一部には、現存するバラックが20棟ほど並んでいた。その中の一つに入って、中谷氏から説明を受けた。

コンクリート製のトイレ（写真6）が一列に長く並び、腰掛ける上面に穴があった。一人15秒で用を済ませるよう、強制されていたという。冬は零下20度以下にならないと、ストーブに火を入れなかったという。　天候が悪く、ゆっくりと見学できなかったが、当時貨車から降ろされた囚人達は、その場でSS隊員に選別され、そのままガス室に送り込まれたという。引き込み線の突き当たるところには、ナチス政権犠牲者国際記念碑、2棟のガス室跡と焼却炉跡、人間の灰が捨てられた池、ガス室への順番を待たされた人々がいた林などがあった。

最後に、ナチス・ドイツのユダヤ人絶滅収容所移送の中枢人物、アドルフ・アイヒマンについてひとこと。彼はSS親衛隊中尉。ゲシュタポ、ユダヤ人課長。彼は敗戦後、アルゼンチンに逃亡、後逮捕され「人道に対する罪」に問われ、裁判で死刑判決が出た。ユダヤ人の迫害について、問われると「大変遺憾に思う。自分の行為は命令に従ったにすぎない」といい、また「一人の死は悲劇だが、集団の死は統計上の数字に過ぎない」の言葉を残して、1962年6月絞首刑になり、灰は地中海に撒かれた。

今回の中欧の旅で、人類史上類を見ない悲劇の場所を体験した。アウシュビッツについては、日本人として、自分なりの知識を持っていたが、70年前の当時のまま保存されている収容所に、驚きと大きなショックを受けた。しかし、ユダヤ人はじめ、関わりのある国の人達は、私以上に大きな感情に支配されるのは間違いない。あらためて「生命を奪う国家権力」とは何だったのか。現在に至る歴史に学びたいと思う。

中谷氏は、「良心の選択」という中で、「今の時代に生きる若者には、戦争の責任はない。ただし、将来それを繰り返さない責任はある。」というアウシュビッツの元収容者スモーレン氏の言葉を紹介している。

参考資料・「アウシュビッツ・ビルケナウ」　著者　テレサ・シフィエボッカ他　日本語版

写真２　　チクロン B 青酸ガス発生薬の空缶

写真 1　　アウシュビッツ１号収容所建物

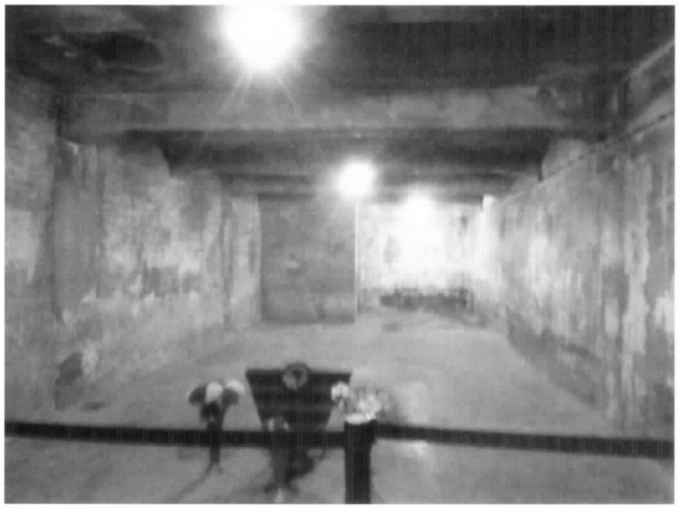

写真4　　ガス室

写真3　　死の壁

写真６　　ビルケナウ収容所バラックのトイレ

写真5　　焼却炉

孫との旅

二宮　巍

私の外孫が今年中学一年になります。そこで小学生の三月の間に「旅」をプレゼントすることになり、三泊四日で、行きたい所を選んで計画を立てなさい、と二月の初旬に指示しました。孫は「鉄道」に小学校に上がる頃から興味を持ち、あちらこちらのスタンプラリーを廻っていました。それと、各地に残る「お城」を見て歩くことが趣味であり、近県では「小田原城」「松本城」「鶴ヶ城」「犬山城」等は見学したらしいのです。

どのような計画が出来るのか待っていたら、「倉敷・福山・呉・広島・宮島・岩国・秋芳洞・大阪」と欲張った計画を立てて来ました。

時刻表を調べて、乗る電車もちゃんと調べてありました。その計画通りに廻ることにしました。

第一日目は、一番の「新幹線」に乗り、倉敷に着いたのは十時でした。歩いて十五分のところにある「大原美術館」を見学しました。戦前に大原孫三郎氏と大原総一郎氏によって集められた西洋の絵画が展示されています。

会社勤務時代には何度も倉敷を訪れていましたが、仕事中心で美術館など縁がなく、一度見てみたいと思っていた場所でした。それから倉の町を散策しました。

三十分電車に乗り福山では「福山城」を見学しました。昨年九月駅から福山城の写真を撮ったのですが、今回は孫のお陰でゆっくり見学することが出来ました。

新幹線で一度広島に行き、呉線で呉に行きました。歩いて十分の所にある「大和ミュージアム」を見学しました。ここは何と云っても「戦艦大和」です。実物の百分の一のミニチュアが展示されています。再び広島へ戻って、駅前のホテルに投宿しました。十八時でした。夕食後、市電に乗り原爆ドームを見に行きました。

第二日目は、先ず「広島城」を見学しました。昭和三十三年に再建されたものだそうです。次に、「原爆慰霊碑」と「原爆記念館」を見学しました。新しく立派な記念館に建て替えられていました。

昭和二十年八月六日・・・・、その前の晩五日、私は愛媛県今治市で、焼夷弾爆撃にあい、丸焼けになっていました。十才の小学校五年生でした。　翌六日、決められた集合場所に向かう途中、八時過ぎに空襲警報が鳴り、すぐ解除されたのですが、思えばあれが広島へ原爆を投下した帰りの飛行機だったのです。

我々の原点はやはり、あの「原子爆弾」です。それから戦後の朝鮮戦争、経済復興、です。やはり『戦争』は、どんな事があっても起こしてはなりません。（※今、朝ドラで「梅ちゃん先生」が放映されていますが、思い出しながら見ています。）

午後の電車で宮島へ。厳島神社参拝、宮島口のホテルに投宿。

第三日目は、電車で三十分岩国で下車、バスで四十分、「錦帯橋」・「岩国城」を見学。錦帯橋を渡った所に「佐々木小次郎」の像があり、ここであの「つばめ返し」の剣を磨いたところとありました。

タクシーで十分の新岩国駅から新幹線で新山口駅（旧小郡駅）へ、駅前のホテルにリュックを置いて、バスに乗り約一時間秋芳洞へ向かう。秋芳台のカルスト台地の下にこれだけの地下空間が何万年という時間をかけて形成されていたとは、驚き以外の何ものでもない。再びバスで新山口駅前のホテルに投宿。

第四日目は新山口を七時半の新幹線に乗り、新大阪へ。環状線に乗り大阪城公園駅へ。大阪城を見学。心斎橋の『水かけ不動』を見て再び新大阪へ十四時半の新幹線で東京に戻る。とにかく慌ただしい旅でしたが、これも喜寿を過ぎて元気でおられる賜物と、感謝しながら筆をおきます。

広島城

豊臣秀吉の五大老の一人、毛利輝元が築いた城
天守閣は１９３１年に国宝に指定されたが原爆により倒壊、１９５８年に外観復元

原爆慰霊碑

百観音霊場参拝をめざして

丸本　大

坂東三十三観音、西国三十三観音、秩父三十四観音、合わせて、百観音霊場となっている。

秩父三十四観音霊場参拝も六周目になり、次に坂東三十三観音霊場参拝の機会を願っていたところ、阪急交通社の坂東三十三観音霊場めぐりのツアーを発見。しかも毎月一回立川、八王子発で全十回で結願となる、日帰りバスツアーである。早速申し込んだ。すでに第一回四ヶ寺、第二回三ヶ寺、第三回五ヶ寺、を参拝した。

ガイドの他、先達さんが同乗して、車内で読経から参拝の手順や各寺の説明や特徴を詳しく解説して、初心者も安心して参加できる状態である。夫婦づれや、仲間づれ、単身参加等、真面目な態度で霊場参拝が出来た。

今年十月二十七日で満願となるので来年は、西国三十三観音霊場参拝を打ち、目標の百観音霊場参拝を目指している。

すでに四国八十八ヶ寺お遍路は結願しているので、彼岸への通行手形になると確信している。

ラスベガスで西岡選手七度目防衛成功・観戦記

斎藤　寛

私がラスベガスに向かったのが九月二十七日、ロス経由で三七度の猛暑の空港に到着。タクシーで十数分、会場のMGMグランドホテルに着く。館内温度は外気温とかなりの温度差で肌寒く、長袖に着替えフロントで宿泊の手続きを済ませる。

試合当日迄の数日間、有名なホテルの中を巡り歩いていても結構楽しかった。過去三回行ったが、カジノは一度も経験がなく、ゲームを楽しんでいる金持ちの光景を見ているだけでした。

いよいよ待望の当日、五時開場～六時試合開始の観戦、前座に時々眼をやるだけで集中して観なかった。しかし、日の丸トランクスを付けている外国人選手の試合はよく観た。四人の選手は全員勝った。そのうち、客足が多くなるにつれてリングサイドの周りには、見覚えのある顔（元世界チャンプ）が集まり、ファンと交歓する様子が随所でみられた。中でも小柄な青年が首からカメラを下げ、試合を撮っていたのが、今をときめく現チャンピオンのドネアーとは・・・後で知り驚いた。また、彼のカメラはプロ級との事なのである。

八時にジミーアナウンサーがリング名前を呼びゴングが鳴る。序盤は挑戦者がガードを固め攻めるが踏み込みが浅く、すきをうかがって一進一退の攻防が続いた。6Rから足と手数が速くなり、差が開く一方で一発集中力と勇気があればKOも可能だった。自分の採点では5ポイント、チャンピオンの勝ちとみた。

そして、私が今から二十七年前、東京都体育館で当時、世界J・ミドル級タイトルマッチを興行の際、来客のボブ・アラム氏（1935年生）を特別席に招待した事があった。その彼が現役、一線でポロモーターとして頑張っている姿をみて共感した。まだ、自分も老いてはいられないと勇気づけられた。トップランク社ボブ・アラム氏である。

国分寺サイトー・ジム

斎藤　寛

MGMカジノホテルから見たラスベガスの街　2011.10.2

米ラスベガス　MGMグランドホテル&カジノで世界戦のテレビ解説（WOWOW）　ゲスト俳優　香川照之とツーショットの俺
2011.10.2

謡曲「隅田川」と東京スカイツリー

田口　正明

隅田河畔に建つ超高層ビルの夜景は、千金の価値がある。いいかえれば、春宵一刻値千金の価値がある。

そのうえ、東京スカイツリーがライトアップされることにより、パリーのセーヌ河畔の夜景にも勝るとも劣らない観光名所が誕生することだろう。

平安時代の歌人の在原業平は、恋のとがにより、都にいたたまれなくなった。恋にやぶれた傷心をいやそうと、東下り（あずまくだり）という難儀な旅にでた。足を引きずるようなおもいで、草深い隅田河畔にたどりついた。

隅田川では、クチバシと脚の赤い鳥が目に入った。都では見かけぬ鳥である。渡し船の船頭は都鳥と教えてくれた。ユリカモメの異称である。

そこで業平は、あの有名な歌を詠んだ。

「名にしおば　いざ言問わん　都鳥　わが思う人はありやなしやと」名曲「隅田川」は、最愛のわが子を人商人（ひとあきないびと）にさらわれた悲劇物語である。母親は悲嘆のあまり狂い、子をさがし求めて、草ぶかい隅田河畔へやってきた。

母親は、業平の名歌を下敷きにして替え歌を詠んだ。

「われもまた　いざ言問わん　都鳥　わが思い子はありやなしやと」「隅田川」は名曲なるがゆえに能・歌舞伎・日本舞踊などにとり入れられた。また、高校の古文の教科書にも、とり入れられた。さらに、平安の昔をしのび、業平の名歌より、言問橋・言問通り・言問団子や、業平の名にちなみ東武伊勢崎線に「業平橋駅」などが、昔を今につたえている。

「古の　偲び浮かぶや　都鳥」この歌は、昨秋、妻の田口照美が番囃子「隅田川」を、神楽坂の矢来能楽堂で演じたとき、これが記念に詠まれた。なお、「隅田川」は、名曲なるがゆえに、東武伊勢崎線沿線に旧跡が散在している。

平成23年度　国立白門会決算書

自 平成23年4月1日　至 平成24年3月31日

収入の部			支出の部		
科目	決算	予算	科目	決算	予算
前年度繰越金	394,064	394,064	印刷費	79,800	100,000
			総会費	194,364	200,000
年会費	189,000	240,000	事業活動費	54,000	150,000
総会会費	153,000	150,000	親睦行事費	227,967	200,000
寄付、祝金	135,462		通信費	70,150	50,000
行事活動特別収入	34,539	50,000	会議費	22,100	30,000
125周年寄付助成	3,050		事務用品費	16,842	30,000
支部活動強化費	50,000		雑費	153,860	10,000
			震災見舞金	100,000	
雑収入	27				
(預金利息)					
			予備費		64,064
			次年度繰越金	40,059	
合計	959,142	834,064	合計	959,142	834,064

平成24年6月17日
会計　真見　敬　印
会計監事　二宮　巍　印

平成24年度　国立白門会予算案

自 平成24年4月1日　至 平成25年3月31日

収入の部			支出の部		
科目	摘要	金額	科目	摘要	金額
年会費	3000円×80	240,000	印刷費	白門会ニュース	100,000
総会会費	5000円×30	150,000	総会費		200,000
特別収入	さくら祭、市民祭	50,000	事業活動費	近隣支部総会祝金	50,000
寄付、祝金		50,000	親睦行事費	納涼会・新年会他	200,000
学術講演会	大学より補助	300,000	通信費	会員連絡他	50,000
支部活動強化費	大学より補助	50,000	会議費	役員会他	30,000
			事務用品費		30,000
前年度繰越金		40,059	雑費		10,000
			予備費		210,059
合計		880,059	合計		880,059

平成23年度活動報告　23・4・1～24・3・31

* 4 / 3（日）「さくらフェスティバル」開催中止
* 6 / 12（日）第34回定時総会（せきやホール）
* 7 / 18（月）（海の日）納涼会（立川昭和記念公園）
* 9 / 14（水）ボーリング大会（立川スターレーン）
* 10 / 10（月）（体育の日）くにたちウオーキング
* 11 / 6（日）「くにたち市民まつり」に参加
* 11 / 17（木）秋の一泊旅行　グリーンピア津南
* 11 / 20（日）秋のクリーン多摩川
* 1 / 22（日）新年会（せきやホール）
* 1 / 26（木）三多摩連絡協議会第26回総会
* 1 / 29（日）三多摩連絡協議会　囲碁会
* 2 / 1（火）名入りジャケット調達
* 3 / 8（木）青梅七福神めぐり　12名参加
* 3 / 20（日）春のクリーン多摩川

○ 白門会ニュース45号発行
○ 俳句同好会「中桜俳句会」毎月一回開催
平成23年10月合同句集「初桜」第2集刊行

平成24年度活動計画案　24・4・1～25・3・31

* 4 / 8（日）「さくらフェスティバル」
* 6 / 17（日）第35回定時総会（せきやホール）
* 7 / 16（月）（海の日）納涼会（立川昭和記念公園）
* 9 / 12（水）ボーリング大会（立川スターレーン）
* 9 / 26（水）囲碁会（社会福祉会館）
* 10 / 8（月）（体育の日）くにたちウオーキング
* 10 / （日）ゴルフ会（詳細未定）
* 10 / 28（日）ホームカミングデイ　多摩キャンパス
* 11 / 4（日）「くにたち市民まつり」に参加
* 11 / 秋の一泊旅行　（詳細未定）
* 11 / 18（日）秋のクリーン多摩川
* 11 / 18（日）学術講演会（せきやホール
* 1 / 20（日）新年会（せきやホール）
* 2 / 観梅（水戸偕楽園）　詳細未定
* 3 / 17（日）春のクリーン多摩川

○ 白門会ニュース46号発行